

SESSION 1

KEYNOTE LECTURES

基調講演

...

Lessons from Experience

Watanabe Hiroshi

経験から得た教訓

渡辺 浩

1. 三つの経験

私はこれまで日本語の学術書を、外国語、特に英語に翻訳して出版するということについて、三つの立場から関係し、経験してまいりました。そこでまず私の経験を簡単にお話しし、次にそれらの経験などから私が得たと考えている教訓をご紹介します。

(1) 東京大学英文図書刊行プロジェクト

私は東京大学に勤務していたとき、英文図書刊行推進委員会委員長として、東京大学の教員の人文・社会科学系の著書を、東大の資金で英語に翻訳し、欧米の出版社から次々に刊行していくことを目指したプロジェクトに直接関わりました。

これは、小宮山宏総長（在任 2005 年 4 月 -2009 年 3 月）の発案で始められました。私が最初に聞かされた前提は、小宮山総長とオックスフォード大学のトップとの会談により、東大から推薦する本を Oxford University Press (OUP) から出版するというものでした。そして私がこのプロジェクトの制度設計から実施までを任されたのです。2007 年 4 月には委員会が正式に発足し、私は東大を定年退職する 2010 年 3 月まで委員長として努力を続けました。

制度設計にあたっては、翻訳出版の経験のある何人かの教授にも相談し、次の二点が特に重要だと考えました。

第一は、良い候補作品の選定です。内容の質が高く、かつ英語読者の興味をひく内容の本を選ぶことです。第二は、良い翻訳です。優れた内容でも、人文・社会系の分野では、翻訳が良くなければ伝わらないからです。

第一の候補作品の選定については、人文・社会科学系の各部局から選出してもらった、英文翻訳に関心や経験のある教授から成る委員会を構成し、その委員会の合議で決めることにしました。また、選定のために、まず東京大学のすべての教員に、直接かつ一斉にメールを送り、プロジェクトの内容を説明するとともに、自薦もしくは他薦で、適切と思われる本を挙げることを依頼しました（自薦だけだと、最もふさわしい作品が候補になるとは限らないと考えて、他薦もあり得るということにしました）。多数の自薦・他薦がありました。そして選定作業は速やかに行うことができました。

第二の、いかにして良い翻訳にするかについては、もっと手数がかかります。

まず、日本語が読めて、人文・社会科学系の学問、特に日本に関する研究に造詣が深く、かつ英語が堪能な方を、任期付きの特任准教授として雇用しました。編集の実務にあたってもらうためです。彼と私と大学本部の国際交流課の担当職員とで、事務的な作業を進めることとしました。

次に最終候補となった著作ごとの翻訳者の選定です。優れた翻訳者を選ぶために、翻訳料は高めに設定しました。原文の日本語何字あたりいくらという設定です（翻訳してできた英語をもとに、何ワードでいくらという方式は、苦心して簡潔な翻訳文にすればするほど翻訳者が損をすることになると思い、避けました）。そしてネット上で、こうした条件を提示し、翻訳希望者を募集しました。特に日本研究関係のサイトなどにも宣伝を出しました。応募者には、これまでの実績を示してもらうとともに、候補作品の一部を実際に翻訳してもらい、それを私と准教授で検討して、最も良いと思われた翻訳者に翻訳を依頼することとしました。そして、少なくとも年に2冊、3冊といったペースで、刊行していこうと考えました。

翻訳を実際に始める前に、選んだ作品の要約と、その優れた点、そして日本での評価などを記した英文のプロポーザルを、著者の協力を得て作成し、OUPに送りました。

ところが、ここで問題が起きました。

プロポーザルを送った著作が、次々とOUP編集部によって刊行を断られてしまったのです。peer reviewを受ける前にです。理由は、市販性がない、つまりあまり売れそうもないということが主でした。私共は、総長とオックスフォード大学のトップとの話し合いで、基本的には、こちらの作品選定が尊重され、そのまま出版されることになっていると当初は理解していたのですが、そうではありませんでした。オックスフォード大学とOUPは別の組織ですし、OUPはあくまで独自に判断するという態度だったのです。もちろん、私も、総長の口約束のみを信じたわけではありません。始めに、総長輔佐となっている若手の教授にOUPに出張してもらいました。そして、あちらの編集者と話し合い、覚書を交わしていました。しかし、締結できた覚書に現れたあちらの態度は、明らかに及び腰でした。実のところ、OUP側は、オックスフォード大学の幹部から言われたので、一応、対応はするが、

面倒なことを依頼されて迷惑だ、という気持ちもあったのではないかと思います。

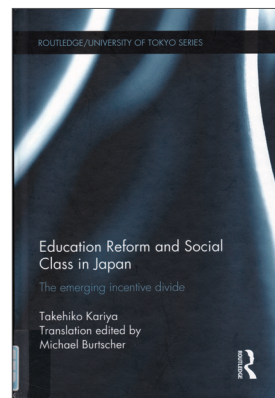
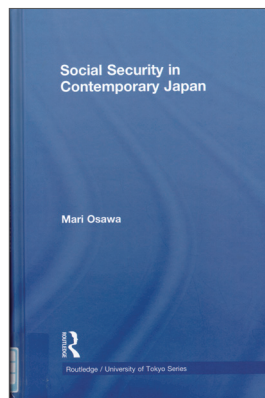
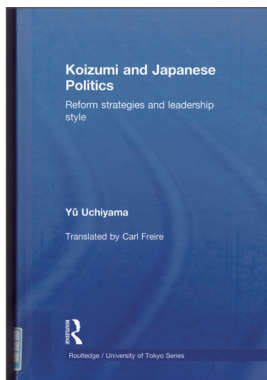
それでも、peer review まで行けば、専門家なら内容の良さは理解してくれるだろうと私は信じていました。内容には自信があったのです。しかし、専門家による評価を受ける以前に、編集者がプロポーザルを見た段階で、すべて却下されてしまったのです。

著者の意見を聞きながらプロポーザルを作ることだけでもかなりの労力と時間を費やしましたので、正直がっかりしました。

半年くらいで5点が次々と門前払いされたところで、もう OUP に期待するのはやめよう、どこでもよいから英語圏で著名な出版社に働きかけて出版してもらおうと方針を切り替えました。雇ってしまった特任准教授に任期途中で辞めてもらうわけにもいきませんから、ともかく刊行するという方向に進むことにしたわけです。

そこで対応してくれた相手が、Routledge でした。幸い Routledge は、OUP とは違って、協力的な態度を示し、Routledge/University of Tokyo Series として、東大の名前を入れて刊行してくれることになりました。

その成果は、現在までで次の3冊です。10年近く努力して、わずかに3冊です。内容はいずれも立派なものだと思いますが……。



1. Yu Uchiyama (内山融). *Koizumi and Japanese Politics: Reform Strategies and Leadership Style*. Routledge, 2010 (\$145.00), 2013 (\$48.95)
2. Mari Osawa (大澤真理). *Social Security in Contemporary Japan: A Comparative Analysis*. Routledge, 2011 (\$140.00), 2013 (\$48.95)
3. Takehiko Kariya (苅谷剛彦). *Education Reform and Social Class in Japan: The Emerging Incentive Divide*. Routledge, 2013 (\$145.00), 2015 (£34.99)

初版の値段が非常に高いことがわかります。つまり、発行部数が極めて少ないわけですね。内山さんの本など、日本語の原本は中公新書です。現在の定価は886円にすぎません。それが、翻訳料も原書の著作権料も負担していないのに、Routledgeでは145ドルです。もっとも、いずれも廉価版が出ていますので、それなりの評価は得ていると思います。

どうしてわずか3冊なのか。

その大きな理由の一つは、翻訳が順調に進まなかったことです。

ある本の翻訳については、専門の翻訳者に依頼しようとしたところ、著者が、自分が指導している英語圏からの留学生がすでにかなりの部分を翻訳している、だから、それを活かしたい、と希望しました。そして、著者自身が翻訳文をチェックするので、その正確性は確保できる、とのことでした。これを認めたのが間違いでした。

一応完成したとして送られて来た翻訳の質に問題がありました。到底、そのままでは使えない。しかも、著者の先生は、とにかく忙しくて連絡も取りにくい。実は、翻訳文の精密なチェックをする時間など、到底ない、というのが実情でした。そこで、やむを得ず、こちらで雇用した、本来編集だけを行うはずだった准教授に、始めからほとんど翻訳し直してもらうという羽目に陥りました。

また、あるアメリカ在住の翻訳者は、最初とても良い翻訳を送ってきてくれたのですが、その内に、あまり理由にもならない理由で、翻訳を送ってくるのが大幅に遅れるようになりました。どうやら家族のトラブルか、精神的に落ち込んだかというようなことがあったようです。しかし、何しろ、ネットで募集しただけの翻訳者ですから、会ったこともない、どういう人か本当にはよく分からない。厳しく催促して追い込んでよいのかもよく分からない、という状態に陥りました。

というわけで、私が東大を辞めるまでに出たのは、結局内山さんの本ただ1冊でした。その後も、2冊刊行できただけです。

これでは、小宮山総長が最初に意図したような、英語圏において東大の人文・社会科学系の研究のレベルを示し、英語圏における東大のprestigeを上げるという効果は、おそらく望めません。

そこで私が辞めた後、後任の委員長などもいろいろ考えたようで、その後違う方式で、東大教員の著作を英語に翻訳して刊行するプロジェクトが進められることになりましたが、偶然にも、私はそれに異なる立場から関わることになったのです。

(2) 東京大学出版会理事長・理事

東京大学英文図書刊行プロジェクトに携わっている間、私は、かつてあった、東京大学出版会とColumbia University Pressとのjoint publishingのような出版の形が取れないかと考えたこともありました。ただそれ以前に、そもそも肝腎の翻訳が進まないという状況でしたので、私の在任中はその方向には行きませんでした。

ところが2011年4月から、私は東京大学出版会理事長を仰せつかりました。出

版会の実務は専任の職員の方々が行うので、私が方針を出して経営するというような体制ではありません。しかし、理事会の主要なメンバーとして、ある程度経営にも関わるようになったわけです。そして理事会の席上、出席理事からくり返し指摘されたのは、「かつては東大出版会も専任の英文図書の編集者を雇用して、かなり活発に英文出版を行っていた。ところが今や英文の編集者もいなくなり、英文出版をしなくなりました。これはよくない。東大出版会の英語出版を復活しさらに発展させるべきだ」ということでした。この趣旨に反対する人はいません。

しかし、たとえば、翻訳費用の問題がありました。

比較的多くの売れゆきが見込めるのは日本研究の学術書ですが、その専門家がすばらしい英語を書くということが望みにくい以上、翻訳のプロセスが不可避となり、その資金をどうするのかという問題に直面せざるを得ません。また翻訳の質を高くして良い本にするには、編集者も必要です。

そこで私は、翻訳に予算をつけることのできる東大の英文図書刊行プロジェクトに、東大出版会が協力して編集の実務に当たり、外国の出版社とも協力して英文出版をするようにすれば、東大にとっても、東大出版会にとってもよいのではないか——そう考えました。そして、一応、協力して出版する仕組みが作られるに至りました。

こうして私は、大学側と大学出版社側の両方の立場から、東大教員の日本語による業績を英文に翻訳して出版するプロジェクトに関わることになったわけです。

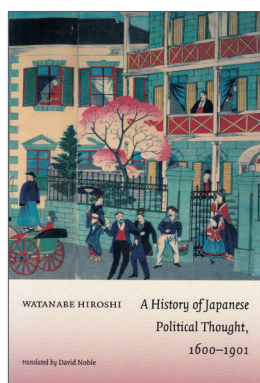
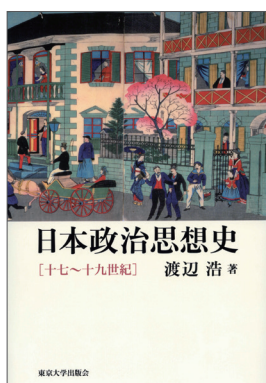
次に、私の第三の経験です。

(3) 国際文化会館、翻訳刊行プロジェクト

2010年2月、私が東大を辞める直前に東大出版会から刊行してもらった本（『日本政治思想史 17-19世紀』）が、たまたま国際文化会館の目に留まり、今は無き日本長期信用銀行が出資した財団による日本語の日本研究書英文翻訳・刊行プロジェクトの対象作品に選ばれました。「長銀国際ライブラリー叢書」というシリーズです。その結果、思いがけず、今度は私自身の本が英語に翻訳されるという立場になりました。

訳者は、アメリカ在住のプロの翻訳家 David Noble さんです。これまでこのプロジェクトで何冊も訳している方で、しっかりとした実績があり、国際文化会館との間でも信頼関係ができていました。そして、国際文化会館側では佐治泰夫さん、そして、英語のネイティブ・スピーカーでいらっしゃる Janet Ashby さんと井元智香子さんの三名が、編集の作業に当たることになりました。東大でのわずか一人、それも編集はそれまで未経験というのとはまったく違う、しっかりとした編集の陣容です。

そして編集者の方々は、Noble さんの翻訳を校閲するだけではなく、引用文のすでに英語訳のあるものについてはそれを探してくださり、さらに私の記述の誤りな



渡辺浩著『日本政治思想史 17-19 世紀』（東京大学出版会、2010）とその英訳版 *A History of Japanese Political Thought, 1600-1901*, by Watanabe Hiroshi. Translator: David Noble. Tokyo: I-House Press, 2012. 560 pages, hardcover.

ども発見してくださいました。献身的な苦勞をしてくださいました。また私自身も、最初の原稿と改訂版の原稿をすべて読んで、翻訳文を検討しました。さらに、佐治さん、Ashby さん、井元さんと私は、国際文化会館に集まって、翻訳上の問題について話し合う機会を何度も持ちました。そこで、訳語・訳文についての細かな検討を、何時間もかけて行いました。（その結果、原本にあった誤記を発見することもあり、原本の訂正に反映することもできました。）

この翻訳書は、出版されると、何人もの人から英語として素晴らしいという評価を得ました。（たとえば Federico Marcon, “Review on *A History of Japanese Political Thought, 1600-1901*, International House of Japan, 2012” in *Harvard Journal of Asiatic Studies* 73:2 [December 2013] を参照）。刊行後に読み直してみると、翻訳に問題があるかなと私自身が感じたところは、今までにわずか 2 箇所を数えるのみです。原著者として、私はこの翻訳に満足しています。

これは翻訳としてかなりうまくいった例だと思います。

2. 教訓

以上の経験と、これまで長い間学界の中において見聞したことから、私は日本の学術書の、特に英語への翻訳について、いくつかの教訓を得たように思います。それを 6 点に絞って、以下に述べたいと思います。

(1) 何を翻訳すべきか：選定基準、翻訳のための編集と調整

日本で高い評価を得た本だから、英語に翻訳しても高い評価を得られるかというと、必ずしもそうではありません。

学問的な研究成果も、ある歴史的・社会的・知的な文脈の中で、形にされています。そして日本の読者は、「開国」以来の1世紀半を越える努力によって）欧米の状況を比較的 Understanding していますから、欧米の本をそのまま翻訳してもそれなりに理解できます。しかし日本の状況をまったく知らない欧米の読者は、日本語からいかに正確に翻訳されていても、そもそもなぜその内容が問題なのか、それを論じることがなぜ重要なのかさえ分からないということがあり得るのです。

したがって翻訳のために、序章を書き改めるとか、英語版読者のためのイントロダクションを新たに書き下ろすとか、内容の一部を削除するとか、章の順序を変えろといった作業が往々にして必要になります。

そのことを、日本の原著者は理解しているようにはならなくては行かない。

ちなみに私の英訳された本は、もともと外国の読者も意識して書いた本なので大きな変更はしませんでした。しかし、それでも、Editorial Conventions という文を冒頭に置いて、江戸時代に使われていた暦の説明や、主要な言葉の翻訳について、説明しました。さらに、英語版のために作った、新たな bibliography を付し、その上、簡単な年表、地図などを付けました。英語版の読者のための配慮です。

(2) 想定読者の特定

どのような読者を想定して語りかけるのかは、いかなる文章を書く時でも問題になることです。しかしもっぱら日本人読者を想定して書いた本は、外国語に翻訳すると、当然ながら問題が起きやすい。翻訳を承諾した時点で、原著者はそのことを考え始めなければなりません。

もっともこれは、日本の学術書の著者が、たまたま日本語で書くのだけれども、自分はこの問題に関心のあるすべての人類に向けて書くのだ、という意識を持っているかどうかで、かなり違うと思います（私自身は、原則としてそういう気持ちで書いていますし、大学院生にもそう指導しています）。

(3) 翻訳者の選定：その分野の専門家か、著者をよく知る人か、プロの翻訳家か

これが大問題です。

その分野の専門家は、内容はよく理解できるかもしれませんが。しかし翻訳がうまいとは限りません。良い英語を書く人であるとも限りません。そこは注意しなければなりません。さらに、一応その問題の専門家ということになっていても、実はアメリカの大学で日本について教えている人でも、日本語の怪しい人はいます。まして、候文・漢文訓読体、さらに漢文そのものとなると、実は、大いに怪しいという人が、むしろ多数だと思えます。注意しないと、問題が起きます（たとえば、一応専門家だということになっている人に、史料の初歩的な誤読を指摘すると、侮辱と受け取られる恐れもあります。その後、作業が停滞するということがさえ起こりかねません）。

また私が経験したように、翻訳者をネットで広く募集するという方式は、公平で良いようですが、問題が起きやすく、さらに問題が起きた時の解決が難しい。何でも公平なら良いというわけではないという一例です。

では著者の知人、たとえば、指導している大学院生に頼むというのはどうでしょうか。これは、先ほど挙げた例にあるように、別の意味で危ないと思います。著者は、「この本にふさわしい翻訳者はいないでしょうか」と聞かれると、気楽に依頼できる知人に頼むという誘惑に駆られます。編集者も手間が省けて、「それではお願いします」と言いたくなります。しかし個人的に親しい関係が、内容の理解力や英語の能力を保証するものではありません。著者が指示し易いと言っても、細部までは困難です。さらに、著者が校閲するといっても、ネイティブ・スピーカーの訳した英文の適否を、そうではない原著者が指摘し、改善を迫るのは、実はなかなか難しいことです。そういうことは、バイリンガルの、しかも権威ある編集者でない、手におえません。

私の経験からは、結局、実績のあるプロの翻訳者の方が良い場合が多いのではないかと、思います。

ただ、どのようにして、ある本にふさわしい、実績もありやる気もある翻訳者を見出すのか、それが問題です。この問題については、むしろ皆さんに教えていただきたいと思います。

(4) 著者と翻訳者が良い翻訳についての共通意識を持つことの重要性／研究者間、または研究者と翻訳者の間の協力関係についての通念形成の必要性

大体、著者は忙しいものです。特に、立派な研究業績を挙げているような人は有名になることが多く、特に忙しいものです。

さらに、日本研究については、次のような問題があります。

日本の学界の規模は、十分に大きいものです。そのため、それぞれの専門の学界の読者・同僚を相手にしているだけでも十分に評価され、自信を持って研究者人生を送っていくことができます。そのために自然科学系の研究者と違って、なんとしても英語で研究成果を発表し、それを評価してもらわないと研究者としてやっていけないという切迫感はありません。つまり自著を翻訳してくれなくても、当人は困らないのです。

したがって、「英語に翻訳してくれるのは有難い話だけれども、そのためにあまり時間や労力を割かれるのも困る」という気持ちになりがちです。しかし良い翻訳を成し遂げるには、著者の協力は不可欠です。原文の不明確な所をはっきりさせたい、誤記と疑われる箇所を確かめたいなど、著者に聞かなければ解決のつかないことが多数生じます。どんな本でも生じます。しかし特に日本研究の人は、「そんなにうるさいことを言うなら、翻訳してくれなくてもいい」という気分になりやすい。また、なぜそのようなことにこだわるのか理解できない。訳者に問題があるのではないかと、思ったりしがちなのです。

そのような場合、どういうことになるか。

忙しい著者は、訳者や編集者からの問い合わせへの対応を後回しにすることになります。訳者・編集者は、返事が来ないのでやきもきします。くり返し催促したり、あるいは、結局、諦めて適当に訳してしまう。そうして、相互不信がつる。——そういうことが起こりかねない。

著者が「面倒だから、適当に訳してよ」という態度では、良い翻訳にはまずなりません。翻訳とは、翻訳者と著者、そして編集者との共同作業なのだ、共同作業として行わないと、訳しても意味のない結果になりかねないという認識を、特に原著者は、翻訳を承諾するのであれば、深く了解する必要があります。編集者も、それを早めに著者に分かってもらうよう図るべきだと思います。

(5) 翻訳書の販売・流通の問題点

東大のプロジェクトが、まず出版社探して問題が生じたということは既述の通りです。やはり、これは重要です。

たとえば国際文化会館で訳していただいた私の本は、実はすでに品切れになっていて、私の方にも、なぜ増刷しないのかというお問い合わせが来るのですが、増刷は行われないうまになっています。また、この国際文化会館の翻訳プロジェクトによる翻訳書は、日本のアマゾンには載るのですが、アメリカのアマゾンには割合最近までは載らなかったと聞いています。しかし、アメリカのアマゾンで検索しても出てこない英語の本というのは、ほとんど存在しないのと同じではないでしょうか。

この国際文化会館のプロジェクトは、翻訳だけではなく、刊行・頒布についてまで資金が用意されていました。そこで、かなりの部数を、刊行後、海外の大学や図書館に寄贈します。そのため、それを行えば事業は完了である、後は売れなくても構わないという気持ちが、国際文化会館にはあるのかもしれません。しかし、好評なら増刷する、さらにはペーパーバック版も刊行してアメリカの大学で教科書に採用されることまで目指すということがないのは、消極的に過ぎるのではないのでしょうか。せつかく、大きな資金と労力を費やしたのですから。

(6) 会計年度単位で翻訳プロジェクトが企画されることの問題点

現在、日本語の本の翻訳・出版について、補助金が出るという仕組みは、いろいろあります。日本学術振興会にもあるし、いくつかの大学にもあります。

ただ、私の別の本（『近世日本社会と宋学』東京大学出版会、1985）が韓国語に翻訳されたとき（박흥규訳『주자학과 근세일본사회』예문서원、2007）には、日本学術振興会の補助を得たのですが、これは手続きが大変でした。著者が、ある期限までに、こういう人に翻訳してもらって、こういう出版社から刊行しますから補助金を下さいという書類を作成して申請するのが基本的な仕組みです。著者自身が、

申請や報告に関わらなければならない。しかも期限厳守です。これは、特に、先ほど述べたような事情のある日本研究者には、かなり重く感じられる負担です。

実際には、翻訳したいと申し出てくれた韓国の研究者がいて、その人に頼まれて私が申請するということがあったのですが、それでも、その時の申請書・報告書作成、学術振興会とのやりとりの苦勞を思い出すと、二度としたくないという気がします。国民の税金だからやむを得ないとは思いますが、特に会計年度のしぼりは、翻訳のような必ずしも計画通りには進まない事業については、時に大きな困難をもたらすという事情があると思います。

なお、東大のプロジェクトについては、もっとゆるやかな仕組みにしました。年度内にどうしても出さなければならないということはありませんでした。もとは税金でも、工夫すれば柔軟にできるはずです。

3. むすび：日本語学術書の翻訳の意義

日本語で出版された人文・社会科学系の学術書を英語に翻訳して、出版する——このことには重要な意義があります。ぜひ進めるべきだと思います。

それは、単に、日本の国際的な文化的 prestige を上げるというようなナショナリズム的動機によるわけではありません。そうではなく、(敢えて大きなことを言いますが) 世界の、人類の、人文・社会系の学問の質を高め、より優れたものにしていくためです。

その理由は、大きく二つあります。

第一に、日本研究についてです。

英語を中心とした西洋の言語だけで人文・社会系の学問をしている人は世界に多数います。その人々がものを考える際には、日本の歴史・日本の文化・日本の社会を考慮に入れず、比較の対象にも含めずに、ヨーロッパと北アメリカを中心とした非常に狭い範囲での人類の経験のみを材料として考えることが非常に多い。それが実情です。彼らが、何か一般命題、一般理論のように述べていることが、日本を含めて考えるとまったく通用しない、あてはまらないということがよくあります。意図しているわけではないのですが、実は、視野が狭い。たとえば日本のようなタイプの近代社会もあり得るということに想像が及ばない。また、世界の近代の革命を考える時に、明治維新という非常に徹底した大革命を当然に含めるということがなされていません。今振り返ると、単に長い回り道をするきっかけになっただけのように思えるロシア革命などよりも、明治維新は、よほど深い革命だったと思うのですが……。

また、一応日本のことを含めて考える人でも、その日本の理解があまりに浅い、あまりに薄い、つまり浅薄で、失笑するほかないということもあります。ところが、そういう人が世界的権威になり、しかも、日本についても触れているために、その

著作が日本語に翻訳される。そして、日本人自身が「そうか。日本とはそういうものなのか」と思ったりする。そういう愚かしいことが起きています。

本当は、欧米の日本研究者が、日本の最先端の研究を自分で翻訳して、欧米に紹介するということをしてくれればいい。しかし、それはまずしてくれません。日本の欧米研究者は、欧米の欧米についての最先端の研究を速やかに翻訳して、日本の素人に紹介することを使命の一部と考えているようですが、欧米の日本研究者は日本の日本研究を訳しません。欧米の日本研究者に「何故その主題を研究しているのですか」と質問すると、しばしば「このテーマについては英語での本がまだ出ていないから」という答えが返ってきます。だったら、日本での研究を翻訳すればよさそうですが、それはしない。そして、日本語の研究を利用しながら自分で本を書くのです。

翻訳が、高度な学問的業績だということが、欧米の大学では理解されていない。そういう嘆かわしい事実があるために、そうせざるを得ないという事情は分かりませんが、ともかくそれが西洋の実情です。

日本という、中国とも違う、インドとも違う、似ていると言われる韓国とも実は非常に違う、その独特の歴史・文化・社会について、広く世界の学界に理解してもらうことは、世界の学界の水準、人類についての理解の水準を上げるために、是非とも必要です。そして、そのためには、日本語の学術書をどんどん日本で翻訳して、刊行していく、そうすることによって貢献することが望ましいと思います。

第二に、日本研究に限らず、日本語でなされている人文・社会系の研究の成果を英語に翻訳し刊行することも、ぜひ進めるべきだと思います。

昨年、日本の二人の自然科学者がノーベル賞を受賞しました。その際、21世紀に入ってからのノーベル賞受賞者数は、日本がアメリカ合衆国に次いで二番目に多いということが話題になりました。ノーベル賞受賞が、学問の水準をどれだけ正確に反映しているのか、正直に言って疑問がないわけではありません。しかし少なくとも、日本の自然科学研究の水準がかなり高いということの一つの証拠だとは言えると思います。

しかしある国の学問の水準が、自然科学系は非常に高いが、人文・社会科学系は非常に低いということがあり得るでしょうか。学問の自由があるところでは、まずあり得ない。私は、東大のさまざまな分野の先生を知っていますが、自然科学の人は賢くて、人文・社会系の人は賢くないとは到底思えない。似たようなものです。また私は、これまで数十回、おそらく百回近く、多種の国際シンポジウムに参加しています。そういう場で、日本の研究者の発表の水準が低いと思ったことはありません。いつでも他より高いと感じます。日本の人文・社会系の学問の水準は、自然科学に劣らずに高い。そう見てよいのではないのでしょうか。

しかし外国では、日本の人文・社会系の学問の存在感は、自然科学の学問のように大きくありません。それはやはり言語のせいだと思います。最初から英語と数

式とで研究成果を伝えられる分野と、そうでない分野の違いだと思います。

ですから日本研究に限らず、日本でなされている人文・社会科学系の研究成果を翻訳し世界に紹介することは、人類全体に貢献することになる——そう私は確信しています。

以上のような意味も含めて、今日と明日のこのシンポジウムは、非常に意義のある、重要な機会だと思います。これからの議論の成果が、現実に繋がっていくことを切に望みます。ご静聴ありがとうございました。